

平成三十年度生 入学選考試験 国語 「特待生入試」

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間は、知覚、記憶、思考の各過程の組合せの結果としてある種の判断を下すのだが、その一連の認知行為の中で各過程のエラーが積み重なり強め合って知らぬ間に判断エラーをしてしまうことになる。

人はある事象を見たとき必ず何らかの信念(例えば、B型の血液の人間は二面性がある)を持ち、その信念に沿って「こんなことが起こるだろう」と予期し(彼はB型だから矛盾した行動をとるだろう)、結果を見たとき予期に合致するよう I しようとする傾向がある(矛盾した行動のみを記憶する)。その結果、予期していた通りのことが起こったとしか見ないから信念がいつそう強められる。つまり、信念↓予期↓予期を強化するよう結果を解釈↓いつそう強い信念となる、というプラスのフィードバックがはたらき、ますます頑固に信じるようになるのだ。

この場合、「こんなことが起こるだろう」と予期する段階において「こんなことは起こりえないだろう」とはいっさい思わず、また結果を見たとき予期に反する事実は無視してしまう傾向がある。また、予期に沿った情報は記憶しやすいが、II には注意がいけないこともある。例えば、女性ドライバーは運転が下手だという信念の持ち主は、そのような目で常にドライバーを見ており、実際に下手な女性ドライバーを目撃すると信念をいつそう強める。運転が上手な女性ドライバーがもっと多くいても記憶に残らず無視してしまうのだ。ア

このプラスのフィードバックによって、①予期が結果を決めるだけでなく、予期したことが実現してしまうという逆転した状況も生まれかねない。先生が「この子はできが悪い」と思い込む(予期してしまう)と、どのような行動もできの悪さに結びつける。そのため、ますますできが悪いという解釈が積み重なり、(せつかく本人が努力していても目に入らず)結局その子どもは「落ちこぼれ」になってしまう。この場合、先生の予期が原因となった落ちこぼれだから、実は「落ちこぼし」なのである。イ

もう一つの判断エラーは、サンプルの数が多いと平均的な値に近づく(これを数学で「大数の法則」という)が、サンプルの数が少ないと平均からのズレが大きいのが普通であるのに、それがあたかも平均であるかのように誤認してしまうというケースである。「あの医者は名医だ」という噂があり、事実多くの患者がそう言う場合は信用できる。ところが、「あの医者にかかる」と女の子が多く生まれる」という噂となると怪しいのだ。ウ

それと似たことで②「平均への回帰」という現象がある。ある生徒の学校のテストの成績は上下するのがつきものだが、何回かで平均するとある一定のレベルになるのが普通である。各回のテスト結果は平均の力プラス誤差として出るので、誤差は体調や集中度や寝不足などによって良かったり悪かったりや変化するから、成績は平均点の上下を変動する。しかし、何回もテストをすれば平均に回帰するものである。だから、一回ごとの成績に一喜一憂することなく、自分の平均はこの程度だと見定められればいいのである。普段はいい成績を取っているのに、あるとき(誤差で)悪い成績を取ってしまい、自暴自棄になってしまうということがある。少数のサンプルだけで判断すると誤る例である。エ

野球で「二年目のジンクス」ということがよく言われる。一年目は好成績を残したのに、二年目はさっぱりダメという場合である。イチローのような特段に優れた選手は例外で、ほとんどが並の実力の持ち主だから、一年目は誤差でたまたまいい成績となっただけで、二年目からは平均に戻ったと考えた方が正しいだろう。にもかかわらず、スウィングが悪い、モーションが悪いと指摘され、自分もそうではないかと思込んでフォームを崩してしまい、結局大成しなかった選手が多くいる。オ 数年間を見て実力を見極める度量が欲しいものである。

以上、判断の各過程におけるエラーについて述べてきたが、それらに共通する心理を整理しておこう。まず、「認知的節約の原理」がある。限られた情報から欠けた部分を経験や先入観や単純な A によって補い、効率よく事態を処理しようとする心理のことだ。本人にとって負担が少ない思考法だが、そこにエラーが生じてしまうのだ。

続いて、「認知的保守性の原理」を挙げよう。すでに持っているスキーマを保ち維持しようとする傾向で、反証を無視したり、無理にでも自分の描像に合わせてしまう心理である。自分は一貫した考え方をしていると自認できるので III が得られることになる。だからこそ間違いやすいとも言える。③自分が安心できる思考法でつい安住してしまうからだ。

もう一つは、「主観的検証の原理」で、どちらともつかない証拠だけでなく明らかな反証であっても、自分の予期を積極的に支持していると勝手に解釈する心理傾向である。「いやいやよも好きのうち」と身勝手に思い込んでセクシユアルハラスメントに及ぶ人間がその典型と言える。④自分の身勝手に気づかず、全て他人のせいにして安閑としている人にお目にかかることが多いのはこのためだろう。被疑者に対して状況証拠しか見つかっていないのに犯人と決めつけ、すべてその B の下で解釈したがる例もある。犯人が見つかっていないと不安だが、強引にでも決めつけてしまえば安心するのだ。(早く安心したいという気持ちが底に潜んでいることもある。)この心理には、思考の経済性や一貫性なども絡み合っている。こうなるともはや C する気持ちを失ってしまう。

さらに付け加えるとすれば、「偶然性を拒否したい心理」、言い換えれば「確固とした因果関係として説明したい心理」もある。偶然に起こったことであっても必然だと思ひ込み、それをきちんとした因果関係で説明しようとする科学的な理由が見つからず、ついに超常的現象だと考えてしまうケースである。予知夢がテレパシーしかないと解釈し、たまた

まだたったのを透視できたと受け取り、そのまま信じ込んでしまうのだ。認知的エラーを自覚しない人ほど、自分の体験を絶対化して信じ込む傾向が強い。「しょせん、体験したことがない人にはわからない」として、他人の意見や忠告を受け入れなくなってしまうのだ。そして、自分の意見を強調すればするほどその信念はいつそう強くなっていき、もはや後戻りが不可能になる。

むしろ、人間の認知エラーが多いと言っても、私たちは日常生活において大きな支障なしに生きている。それを無意識のうちに矯正したり、または大きな問題が起こらないので気づかないままやり過ごしている。ときには認知エラーが人間の生存にプラスにはたらくていることもあると知っておくべきだろう。あまりに気にし過ぎると神経症を病むことになりかねないからだ。

ただ、突発的な事件が起こって即座に判断を迫られたり、すぐに合理的な解釈ができない事象に遭遇したりしたとき、**IV**が肝腎なのである。それは疑似科学に騙されていないか自らを点検することにも通じるからだ。

問一 次の文章は、本文中に入るべきものである。もつとも適当な箇所を**A**～**オ**の中から選び記号で答えなさい。  
い。

そのようなケースが世の中には多いのではないだろうか。「要領の悪い部下」「下手な野球選手」などゴマンとありそうである。

問二 **I**～**III**に入るもつとも適当な語句を、それぞれ次の中から選び記号で答えなさい。

- |     |         |   |          |   |         |   |         |
|-----|---------|---|----------|---|---------|---|---------|
| I   | 結果を提示   | イ | 安易に解釈    | ウ | 選択的に解釈  | エ | 結論的に提示  |
| II  | 反証となる情報 | イ | 信念にあらう事実 | ウ | 予期された事実 | エ | 結論となる情報 |
| III | 認知的な独自性 | イ | 心理的な安定感  | ウ | 人間的な信頼感 | エ | 保守的な確実性 |

問三 **A**～**C**に入るもつとも適当な語を、それぞれ次の中から選び記号で答えなさい（同じ記号を二度以上用いてはならない）。

- |   |    |   |    |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 状況 | イ | 仮定 | ウ | 解釈 | エ | 類推 | オ | 自省 | カ | 自認 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|

問四 傍線部①の「予期が結果を決めるだけでなく、予期したことが実現してしまう」という逆転した状況」は、筆者のいような原理または心理からの判断エラーによって生まれやすいか。本文中の次の語句の中からもつとも適当なものを選び記号で答えなさい。

問五 傍線部②「平均への回帰」という現象」は、どのような判断エラーを回避する上で有効か。次の中からもつとも適当なものを選び記号で答えなさい。

- |   |                                  |
|---|----------------------------------|
| ア | 誤差のあることを認識しながらも特定の事例を重視して判断すること。 |
| イ | 偶然的に生じた結果を問題にしすぎて判断してしまうこと。      |
| ウ | 誤差の生ずる確率をできるだけ低めに予測して判断すること。     |
| エ | 少数のサンプルから簡単に判断して結論を出してしまうこと。     |

問六 傍線部③で、「自分が安心できる思考法でつい安住してしまう」ために判断エラーが生じやすいと言っているが、そのような人の「思考法」の特色はどのようなものか。次の中から適合しないものを一つ選び記号で答えなさい。

- |   |                   |
|---|-------------------|
| ア | 自分の仮説を絶対化して信じ込む。  |
| イ | 偶然起ったことを必然と思ひ込む。  |
| ウ | 他人の意見や忠告を受け入れる。   |
| エ | 自分の体験を重視し強い信念を持つ。 |

問七 傍線部④のような人は、人の性格や行動を示す次の語のどれと無縁であるか。見ることができるともつとも適当なものを選び記号で答えなさい。

- |   |    |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ア | 頑固 | イ | 無視 | ウ | 度量 | エ | 勝手 | オ | 透視 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|

問八 **IV**に入るべきもつとも適当なものを次の中から選び記号で答えなさい。

ア 認知過程には誤りが多いことを自覚して、自分の推論を絶対化しないこと  
イ 人間の行動には必ずしも合理性がないから、無理にも合理化した説明を受け入れること  
ウ 判断エラーは認知の各過程で生じるのだから、その各過程を分析し再確認すること  
エ 合理的な解釈は常に類推による非合理的なものを持ちエラーを含むことを自覚すること  
オ 自分の推論を相対化しては合理的に解釈ができないことを認識して判断すること

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 に 答 え な さ い 。

言葉の意味は名付けから始まる。子どもはまず、母語の音調、リズム、音素を覚える。この準備は胎内から始まっているようだが、子どもが言語は意味を持つという事実を体験し、身につけてゆくという作業は、出生以後である。言葉を口にするよりも先にかなり多くの言葉（音素の組み合わせ）が何を指すかはわかっているらしい。外国語を話すよりも聞き覚えるほうが一般に先なのと、①これは同じことだろう。

② ダイシヨウ的に、老人は名から忘れる。文法構造のほうはかなり後まで残って、名のあるところは「あれ」「それ」でつぎはぎされる。文法構造あるいは文脈的ネットワークはずいぶん後まで保存されるようである。たとえば「てにをは」である。これは生きてゆく日々によって形成され再形成されたたかな網目構造である。キーワードをいろいろ尋ね、あるいは言い当てながら、ほかならぬその「あれ」に当たるものを言い当てると、老人が全身で喜びを表しながら、「それだ！」という時期がある。これは文脈が何が正しい座かを暗に指示しつづけている証拠であろう。認知症老人の世界（あるいは世界の③ シヤソウとしての言語世界）は、クロスワード・パズルがあちこちにある世界だ。本人はもどかしくはあるだろうが、何が「ぴったりの言葉」かの感覚は残っている段階がある。

しかし、悩ましい問題がすでに古代ギリシャで提示されている。アイデア論である。

私たちは「椅子」といい「犬」という。しかし、さまざまの椅子があり、犬がある。それをまとめて「椅子」「犬」といわせるものは何か。

一般の辞書は言語で「椅子」「犬」を定義している。しかし、私たちは直観的に「椅子」「犬」といつているのであって、定義を覚え、当てはめて、「やっぱり椅子だろうな」とすることはめったにない。では理想的な「椅子」があるのか。

絵入り辞書ではいろいろな椅子の形が描いてある。しかし、とても「椅子」を尽くしたものではない。そこで、プラトンは天上に「椅子」の「イデア」があつて、それは眼にみえないけれども、地上の不完全な「椅子」を椅子と④ トラえるように働いているのであるという。「イデア」には、観念、思想、その他いろいろあるだろうが、元来は「形」ということらしい。こうしたことは若い時にはおとぎ話のように思えたので、今まで真剣に考えたことがなかった。

しかし、高校生のドイツ語の時間、昔のことだから訳読が中心の授業であつたが、真面目な初老の先生が、「犬」と訳しても、日本の犬とは違う。ほんとうは「洋犬」と訳さなければならないのです」と言った。当

時は各種の「洋犬」が跋扈する今と違って、だいたいは柴犬のようなのが「犬」だった。「洋犬」はテリアぐらいか。「ふうん、洋服、洋館、洋樹としなければならぬのか。それでもいろいろあるだろう」と私は思った。しかし、この先生のコメントは頭の片隅に残って『失われた時を求めて』の中の訳語などには、「ブルー」の指しているものと違うのがずいぶんあるだろうな」などと考えた。そんなに違つても、なぜ私たちは外国の小説が読めるのだろうか。あるいは源氏物語を。私は現に読んでいるのだが、不思議である。訳語の少しの違いよりも、厳格主義者には⑤ こちらのほうの問題ではなからうか。

私は最近、ある勉強会で尋ねてみた。イメージとそれに対応する名がありますね。イメージが先だと書いてある本があるけれども、ほんとにイメージなりモノが先ですか、それとも言葉が先ですか、と。答えは、最初に子どもが言葉を覚える時には、モノなりイメージが先でしょうね、だった。

単純にイメージが優先するとすると、われわれは外国の小説をどうして読めるのだろうか？ この質問に対する答えは「それは私たちがいい加減だからです」だった。この「いい加減さ」には深い意味があるぞと私は思った。

子どもは名付けを楽しむ。名付けは世界の⑥ セイブクである。子どもは行きつもどりつ、言葉の範囲を確定してゆく。しかし、それには⑦ ゲンミツな面といい加減な面とがある。かなりいい加減な椅子でも座れば椅子という。いや、壊れて座れない椅子も「椅子のこわれたの」と認識する。しかし、非常に形は似ていても「いや、椅子でない」と断言する場合もある。「椅子」の範囲は、また、拡大したり縮小したりする。そして、「何々に似たもの」といったりする。言葉とその意味の対応はアメーバに似ている。

私たちの⑧ サツカクは、帝国主義国が世界を分割してしまつたように、言語が世界を分割していると思ひ込んでいることかもしれない。実際はそうではない。さまざまな椅子を「椅子」と名付けることによって、私たちは利益も得たが、粗雑にもなつた。犬に比べて⑨ キウウカクは一万分の一にも鈍くなつたそうである。他の感覚もそうだろう。

私は、たまたま、色彩のエスノ言語学によって、いかに人が色を言語化することの不十分かを知つた。⑩ 普通の市民は高度に概念的に色をみている。樹を緑に、海を青く、と「固有色」に塗るのが多数派である。小学校あるいはそれ以前の教育の結果である。画家たちも印象派の時代になって初めてこれに挑戦したのである。

しかし、樹は緑、晴れた空は青という「概念化」がなければ、子どもは⑪ トウワクしてしまうかもしれない。人間にとって⑫ 未曾有のもの色の色の同定はずいぶんあやふやである。月を最初に⑬ シウカイした一九六八年

の宇宙飛行士は、月の表面の色についての意見が大幅に分かれた。ある人は明るい色といい、ある人は緑がかっているといった。私も『アサヒグラフ』でみたが、何ともいいようのない色であった。私たちは、みたことのない色は、既知のどれかの色に片寄せて認知する。私の場合は淡い灰色であった。<sup>④</sup>この片寄せは言語という粗い網の目で世界を分割しようとする場合には避けられない。物体の色にしてこうであるから、抽象概念はなおさら、具体物も同じくであろう。

色は、精神医学者サリヴァンの言う「合意による妥当性確認」によってしか伝達できない。「これが赤だよ」「うん、ぼくにもこれが赤だ」。これが合意である。つまり、純粹の「質」は意見の一致によってしか確認できないのである。形ならば、いろいろ説明することができる。しかし、色については意見が一致しなければそれ以上の正否は問えない。

プラトン — 紀元前5〜4世紀のギリシアの哲学者。

ブルースト — マルセル・ブルースト(1871〜1922)は、フランスの小説家。代表作に『失われた時を求めて』がある。

エスノ言語学 — 言語と民族文化の関係を研究する言語学の一領域。民族言語学。

『アサヒグラフ』 — 当時刊行されていた写真雑誌。

サリヴァン — ハリー・S・サリヴァン(1892〜1949)は、新フロイト派に属するアメリカの精神医学者。

問一 波線部①〜④のカタカナを漢字に漢字をひらがなに直して答えなさい。

問二 傍線部①「これ」の内容を三五字以内で答えなさい。

問三 傍線部②「こちらのほう」の内容を三五字以内で答えなさい。

問四 傍線部③「普通の市民は高度に概念的に色をみている」を七〇字以内でわかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部④「この片寄せは言語という粗い網の目で世界を分割しようとする場合には避けられない」と筆者が言うのはなぜかを七〇字以内でわかりやすく説明しなさい。